

## My History

### マイ・ヒストリー

2002年 鳥取大学へ進学  
2006年 卒業後、ベトナムへ  
2008年 帰国、農業を手伝う  
ように

## My Dream

### マイ・ドリーム

これからも矢賀の農業を守っ  
ていきたい。

### 私の好きな言葉

一所懸命



畑の入口では、家族のマスコット「まる」ちゃんがお出迎え。



矢賀地区の住宅地に広がる飯田さんのビニールハウス。



ミネラルを豊富に含む細胞がびっしりと付いたアイスプラント。飯田さんの作るものは、「濃い味がする」と人気を集めています。



ご両親の澄雄さん、悦子さんとともに。

野菜を食べる方の声か、  
自分の励みになる。



2017  
こいぶみ 6  
JUNE  
vol.51

### もくじ

こいびと——表紙の生産者をご紹介 東区矢賀 飯田 和浩さん	2
特集 多様な組合員ニーズに 応える 営農指導体制	4
●JAトピックス	6
シェフおすすめとっておきレシピ 旨味たっぷり 肉厚シイタケ料理	9
支店紹介 中筋支店	10
管内農家の経営実態 中川農園 安佐北区白木町	12

健やか生活相談室 健康な歯を守るために。 お口ケアの ポイントを教えて!	14
やさしい菜園プラン キュウリ	15
●クロスワードパズル	16
●おしゃべり広場	16
●HAPPY SMILE	17
●JA広島市 情報BOX	18
●ほのぼの家族のしあわせ通信	20

### こいびと——表紙の生産者をご紹介

# 飯田 和浩さん

(35歳)  
東区矢賀

江戸時代から続く家で、幼い時から農業を手伝ってきた飯田さん。学生時代は海外でボランティア活動を行うなど、経験を積んで農業の世界に帰ってきた。消費者の思いを感じながら野菜作りに取り組み飯田さんにお話を伺った。

## 困っている人を助けたい その思いで海外へ。

広島駅からJR芸備線までと駅の矢賀地区は、もともと農業の盛んな土地。矢賀ウリや矢賀チシャなどの伝統野菜があり、かつてはレンコン畑が広がっていた。この土地で育った飯田さんは、子どものときから祖父母の畑仕事を手伝いながら暮ら

していた。「海外で困っている人を助けたい」そんな思いから、発展途上の農村の生活改善に関わりたくいと、大学では農村における下水道に関する研究を行った。在学中からベトナムに通い、ベトナムの農業の現状を学んでいった。大学卒業後は、日本語教師の助手として現地に滞在し、ボランティア活動を通じてベトナムの人々の状況を自分の目で確かめた。

## 「必死に生きる途上国の人たちの姿に、刺激を受けました」 消費者の声を聴き、 その求めに応じていく。

2年間ベトナムで過ごした飯田さんは、帰国後、両親を助けながら農業に携わるように。幼い時から手伝いをしていたので、違和感はなかった。現在は、コマツナ、ミズナ、ホウレンソウなどの葉物野菜、ナスやピーマン、伝統野菜の矢賀チシャ、夏には空芯菜もつくっている。「空芯菜は広島では早い段階で手掛けました。最初は売れないものを何で作るんだと言われることもありましたが、今は外国の人も買いに来るほど人気を集めています」外国人の友人も多く、帰国後も飯田さんの身近には「海外」がある。求めるものが多様化し、以前は売れなかった野菜にも、お客さんが付くことを知った。

そこで感じたのが、消費者の声を聴くことの大切さだ。東区役所で木曜日に開催され、新鮮な野菜を毎週出荷している「木曜あい市」では、需要を直接知ることができ、「おいしいから食べるの押し売りではなくて、おいしかったからもっとほしいと言われるものを作っていきたいですね」一方で、「おいしさ＝甘み」と解釈されることも恐れている。栽培している

「矢賀チシャ」は、苦味が特徴だ。野菜が本来持っている味を、次の世代に伝えていかなければならない。そのために、飯田さんご両親が中心となって地域の子どもたちとともに、矢賀チシャの栽培・収穫を行う活動が続いている。「ただ栽培を続けるだけでなく、知ってもらえる活動も大切です。いずれは私も活動に参加していくつもりです」

## 江戸時代からの伝統を 未来へ引き継いでいく。

およそ200年続く飯田家は農業を続けながら、この地を守ってきた。飯田さんご両親は、地域農業を活気づけ、伝統野菜を作り続けてきた。「今は、農業を続けてきた親の顔が、ブランドみたいなのです。そのブランド力にお客さんが集まる。いずれは自分がそれを引き継いでいかなければと思っています」

技術の進歩や消費者の嗜好の変化で、農業自体の幅も広がり、以前よりも可能性が見えてきたと語る飯田さん。お客さんからの「おいしかったよ」の声を励みに、今日も畑と向き合っている。



収穫を間近に控えたカブ。「私も大好きです」と飯田さん



本誌タイトル「こいぶみ」とは、JA広島市の気持ちをまっすぐに、組合員をはじめ多くの人に届けるため、広報誌を手紙に見立てたところから命名いたしました。「こいぶみ」の「こい」には、人や地域を愛する「恋」のほか、多くの人に呼んでもらえる「来い」、情報が「濃い」など、さまざまな意味を込め表現しています。